

真の福音とは何か： 新約聖書における真理論についての考察¹

原 口 尚 彰*

抄 録

初期キリスト教は、周辺世界を構成する異邦人世界やユダヤ人世界と真理についての論争を繰り返しながら、新しい真理認識を形成して行った。初代教会の宣教は、真の神は唯一であり（I コリ 8:6; I テサ 1:9）、天地を創られた神だけが神であるという一神教的世界観を真理とし、人間や動物を模した神々の像を拜む異邦人世界の宗教観を誤りとしている（ロマ 1:18-32）。キリスト教内部の福音理解を巡る論争は真理論の性格を持っていた。律法と福音を連続的に考えるユダヤ的な福音理解に対して、パウロは律法からの自由を「福音の真理」と呼び（ガラ 2:5, 14）、その根拠を自らに示された神の召しと啓示に求めた（1:1, 15-16）。信仰義認の教理の真理性については、旧約聖書を引用して聖書証明を試みている（ロマ 1:16-17; 4:1-25; ガラ 3:6-29 他）。

ヨハネ福音書において、神の子イエスは恵みと真理の啓示者であるが（ヨハ 1:14, 17）。弟子たちに与えた別れの説教においてキリストは自らが、「道であり、真理であり、命である」ことを明らかにしている（14:5-6）。真理を体現するイエスの言葉を信じ、そのもとに留まる者は、イエスの弟子として真理を知り自由を得ることとなるが（8:31-32）、信じない者は虚偽の内に留まり続け、罪のうちに死ぬこととなる（8:24）。

Keywords: 新約聖書、福音、真理、初代教会、パウロ

1. はじめに

真理は虚偽に対する概念であり、真理問題についての言及は多くの場合において、何が真理であ

り、何が虚偽であるかをめぐる論争的状况を前提にしている。新約聖書の真理論について言えば、初期のキリスト教指導者たちがキリストの福音の真理性を外部世界に対して論証すると共に、キリスト教世界の内部で正しい福音理解を確立して行かねばならない状況に置かれていたことが、一部の新約文書において真理の問題を深く論じる背景をなしている。今回は特に、パウロ書簡とヨハネ

* Haraguchi, Takaaki
フェリス女学院大学国際交流学部教授
日本ルーテル神学校非常勤講師

文書における真理の問題に焦点を当てて、新約聖書における真理理解の特色を考えてみたい。

本論考は新約聖書の真理論の解明について帰納的な手法をとり、問題となる新約聖書の記述を釈義的に考察した上で全体像を得ることを目指すこととする。新約聖書において真理を表す基本的単語はアレーティア (ἀλήθεια) であり、真理についての議論は鍵となるこの単語を用いて行われる場合が多いが、真理性の証明が聖書解釈や伝承の引用によってなされる場合は、必ずしもこの単語が用いられる訳ではない。この単語の使用例は共観福音書や (マタ 22:16; マコ 5:33; 12:14, 32; ルカ 4:25; 20:21; 22:59) 使徒言行録 (使 4:27; 10:34; 26:25) には比較的少ないが、真生パウロ書簡 (ロマ 1:18, 25; 2:2, 8, 20; 3:7; 9:1; 15:8; I コリ 5:8; 13:6; II コリ 4:2; 6:7; 7:14; 11:10; 12:6; 13:8; ガラ 2:5, 14; 5:7; フィリ 1:18) や第二パウロ書簡 (エフェ 1:13; 4:21, 24, 25; 5:9; 6:14; コロ 1:5, 6; II テサ 2:10, 12, 13; I テモ 2:4, 7; 3:15; 4:3; 6:5; II テモ 2:15, 18, 25; 3:7, 8; 4:4; テト 1:1, 14)、さらには、ヨハネ福音書 (ヨハ 1:14, 17; 3:21; 4:23, 24; 5:33; 8:32, 40, 44, 45, 46; 5:33; 8:32, 40, 44, 45, 46; 14:6, 17; 15:26; 16:7, 13; 17:17, 19; 18:37, 38) やヨハネ書簡 (I ヨハ 1:6, 8; 2:4, 21; 3:18, 19; 4:6; 5:6; II ヨハ 1:1, 2, 3, 4; III ヨハ 1:1, 3, 4, 8, 12) には非常に多くなっている²。

2. パウロ書簡における真理

2.1 真正パウロ書簡における真理

パウロが真理について論じるとき、その具体的内容は文脈により異なっているので、パウロの真理論について一般的・抽象的に論じることは出来ず、それぞれの論争の文脈に即して、その特質を検討する必要がある。

2.1.1 真理と神認識

パウロはロマ 1 章 18 節以下のところで、世界の創造主を信じる一神教的立場から、ギリシア・ローマ世界の多神教的世界観の批判をしている。ギリシア・ローマ世界の人々は自らを知者と任じているが、神ではない人間や動物の像を拝む偶像

礼拝に陥っている (ロマ 1:22-23, 25)。人は自然世界の秩序の背後に神の存在を認識する可能性を与えられているが (1:18-20)、彼らがそれを超えて創造主を信じ崇めることをしないために、神ではない人間や動物の像を拝む偶像礼拝に陥っている (1:21-23)。また、偶像礼拝は神の創造の秩序を乱す様々な倫理的混乱を生む結果となっている (ロマ 1:24-31)。こうした議論はヘレニズム・ユダヤ教の異邦人世界の批判を踏襲しているが (知恵の書 13 章を参照)、この文脈でパウロが主張する真理とは、天地の創り主なる唯一の神を知り、崇め、仕えることである (1:18, 25)³。つまり、正しい神認識が真理として主張され、多神教的な神認識が偽りとされている。

2.1.2 真理と救済史

ローマ書 3 章においてパウロはユダヤ人であることの利点を論じる関連で、イスラエルの救済史において顕された神の真理の問題に言及している (ロマ 3:4, 7; さらに、15:8 を参照)。この場合の神の真理とは神の信実 (πίστις) とほぼ同義であり、民との契約を忠実に守ることを意味する (ロマ 3:3 と 3:7 を比較せよ)⁴。イスラエルの民は、神の言葉として律法の戒めを託されたのに、それらを忠実に守ることをしなかった。しかし、パウロによれば民の不信実や偽りによって神の真理や信実は無効とならない (3:3-4)。神が世に下す裁きにおいては、人間の偽りに対して神の信実が際立つ結果となる (3:3)。救済史においては、人間の側の偽りを乗り越えて、神の信実が不変の真理として立ち現れて来る⁵。

2.1.3 真理と福音

複数の異なる福音理解が併存していた初代教会において、宣教者たちはキリスト教徒の間で自らの福音理解の正当性を主張する必要があった。パウロが最初に宣教し、教会を設立したコリントでは、後に訪れてきた宣教者たちとの競合状況の中で (II コリ 10:1-11:33)、誰が真正な宣教者であり、何が真正な福音であるかが問われた。論争的

な状況の中で、パウロはコリント人たちに対して自らの宣教者の務めの正当性と、宣教の言葉の真理性について論証している（3:1-4:15; 5:11-6:13）。宣教者が語る福音は、キリストの真理を明らかにする神の言葉であり（II コリ 4:2; 6:7; 11:10 さらに、ロマ 15:8 を参照）、宣教者は宣教活動を通して真理に仕える者とされる（II コリ 13:8）。

ガラテヤ書 1-2 章においてパウロは、彼が去った後にガラテヤ教会にやって来た論敵たちが説いた「異なる福音」に対して、自らが説いている「福音」の真正性を論じている（特に、ガラ 1:6-9 を参照）⁶。論敵たちはガラテヤの異邦人信徒たちに対して、ユダヤ人のように割礼を受けて律法を守ることを勧めていた（5:1-4）。彼らが説く福音は律法の遵守を前提としており、彼らの宣教はユダヤ教の改宗運動の域を脱していなかった⁷。これに対して、パウロが説く福音は割礼や律法の遵守を前提としておらず、律法の拘束からの自由を本質的構成要素としていた（4:4-7; 5:1）。パウロが主張する「福音の真理」（ガラ 2:5, 14; 5:7）とは律法からの自由（ガラ 5:1）に他ならない⁸。パウロが語る福音が真理である根拠としては、彼の使徒職と同様に（ガラ 1:1）、それが神の啓示によるものであることが強調されている（ガラ 1:1; 1:15-16; I コリ 15:9）⁹。

2.1.4 真理と伝承

I コリント書 15 章においてパウロは、死者の復活の可能性を疑う者たちに対して、彼が最初に伝えた福音の内容に注意を喚起しながら、復活信仰の正当性を主張している（I コリ 15:1-3a, 3b-8）。キリストの死と復活・顕現を中核的内容とするケリュグマは、初代教会の伝承としてパウロ自身が受け、コリント人たちに伝えたものであった（15:3a）。その内容の真理性の根拠は、先人たちから伝えられた伝承であるという事実と、復活・顕現を体験した者たちの証言の真実性であった（15:5-8）。初代教会は初期ユダヤ教の口頭伝承について、人間の言い伝えであるとして規範性を否定したが（マコ 7:3, 8; 平行; ガラ 1:14）、キ

リスト教の信仰告白伝承については規範性を認めていたと言える（I コリ 11:23-26 も参照）。

2.1.5 真理と聖書

初代教会にとっても聖書は規範的意味を持っていた。新約聖書において聖書（γραφή）とは旧約聖書のことであり、神学的な発言の根拠として旧約聖書の記述が度々言及されている（マタ 21:42; マコ 12:10, 24; ルカ 4:21; 24:27, 32, 45; ヨハ 2:22; 7:38, 42 他多数）。新約聖書には「・・・と書かれている」という表現が頻出するが（マタ 2:5; 4:4, 6, 7, 10; マコ 1:2; 7:6; ルカ 2:23; 24:46; ヨハ 2:17; 6:31, 45; ロマ 1:17; 2:24 他多数）、それは「旧約聖書に・・・と書かれている」という意味であり、旧約箇所引用の定型句となっている。

真理論に関して言えば、パウロは真理と考える信仰義認論を展開するにあたって、旧約聖書の関連箇所を引きながら証明することを試みている（ロマ 1:17 = ハバ 2:4 LXX; ロマ 4:3, ガラ 3:6 = 創 15:6 LXX）。旧約聖書が真理であるキリストのピステイス（信実、信仰）を証しする証言の書であるという認識がそこには存在している。聖書引用には聖書解釈の問題が関係しており、パウロが展開した聖書証明は、当時のユダヤ教による聖書解釈とは鋭く対立することとなった。例えば、ローマ書 4 章においてパウロはアブラハムがイスラエル民族の父祖であるだけでなく、キリストを信じる信仰者の父祖であることを聖書証明によって論証しようとした（ロマ 4:1-25; ガラ 3:6-29 を参照）。その際にパウロは専ら創世記 15 章 6 節に注目して、信仰の人アブラハムという側面を強調し、人間の常識では考えられない高齢出産の可能性を信じたことを、「無から有を生じさせる」創造主への信仰に帰している（ロマ 4:17 を参照）。この信仰はキリストの死人のうちよりの復活を信じるキリスト教徒の信仰の先取りとされている（ロマ 4:18-25 を参照）。

それに対して、初期ユダヤ教文書やその影響下にある一部のキリスト教文書は、創世記 22 章のイサク奉献の記事に基づいて創世記 15 章 6 節を

解釈して、試練を通して実証されたアブラハムの信実が義と認められたとしている（I マカ 2:52; シラ 44:19-23; ヘブ 11:17; ヤコ 2:21-24 を参照）。ユダヤ教にとって信実と信仰は矛盾するものではない。神を信じる者は神に対して信実であり、アブラハムは神に対して信実な義人の模範的な例を提供することとなる。

2.2 第二パウロ書簡における真理

第二パウロ書簡に属するコロサイ書やエフェソ書においてはキリスト論的な真理理解が強調されて、「真理はイエスのうちにある」（エフェ 4:21）とされると共に、イエス・キリストの福音は「真理の言葉」と呼ばれる（コロ 1:5; エフェ 1:13）。真理の言葉としての福音はキリストの血による罪の贖いを内容としており、「救いの福音」とも呼ばれている（エフェ 1:7, 13）¹⁰。信徒たちは宣教の言葉に耳を傾けることを通して、「真理によって神の恵みを知る」こととなる（コロ 1:6）。

真理はまたキリストにある新しい実存の在り方の特質とされ、信徒たちは「神に従い真理による義と聖により創られた新しい人を身に付ける」ように求められている（エフェ 4:24）。書簡後半部の倫理的勧告において、真理は善や義と並ぶ基本的徳目とされ（5:9; 6:14）、信徒たちは偽りではなく、互いに真理を語るように求められている（4:25）。

3. ヨハネ文書における真理

3.1 ヨハネ福音書における真理

3.1.1 神の子キリストの真理

ヨハネ福音書冒頭のロゴス賛歌において「恵と真理」（ヨハ 1:17）は、受肉した神の子の栄光の構成要素であり、信仰者である「私たち」が認識し、証言する事柄とされている（1:14）¹¹。この真理は科学的・客観的真理ではなく、宗教的・主体的な真理であるので、信じる者には明らかであるが、信じない者には明らかではない¹²。ヨハネ福音書の信仰理解は主知的であり、信じることと真理を知ることとを同時的なことと捉えている¹³。

最後の晩餐の際に弟子たちに与えた別れの説教において（14:1-16:33）、キリストはトマス「主よ、あなたがどこへ行くのか私たちは知りません。その道を私たちはどのようにして知ることが出来るのですか？」という問いに答えて、自らが、「道であり、真理であり、命である」ことを宣言している（14:5-6）。この短い標語風の言葉は、死と復活・昇天の出来事を前にしてキリスト自身が神に至る道であり、キリストを信じる者にはこの時点ではまだ十分に理解されず、謎めいた言葉に留まった¹⁴。

3.1.2 真理と自由

ユダヤ人民衆との対話の中で、イエスは真理と自由との関係に言及し、「真理はあなた方を自由にするであろう」と述べる（8:32b）¹⁵。この自由とは身分法的な意味での自由ではなく、罪の支配からの自由のことを述べている。

罪を犯す者はたとえ自由人の身分にある者であっても、その心は罪の支配下にあり、自由ではない（8:33-34; さらに、ロマ 6:17 を参照）。真理を体現するイエスの言葉を信じ、そのもとに留まる者は、イエスの弟子として真理を知り自由を得ることとなるが（8:31-32）、信じない者は虚偽の内に留まり続け（8:44-46）、罪のうちに死ぬこととなる（8:24）¹⁶。

3.1.3 真理についての証言

ヨハネ福音書ではキリストの証人としての洗礼者の役割が強調され（1:19-28; 5:33）、ヨハネは自分の弟子たちの前でキリストを「世の罪を取り除く神の子羊」（1:29, 36）、あるいは、「神の子」と呼び（1:34）、彼らの一部はキリストの弟子となっている（1:35-39）。後に、キリストはユダヤ人対話者たちに対して、ヨハネが真理について証した事実を指摘することになる（5:33）。

別れの説教においてキリストは、復活・昇天の後に父のもとから下す聖霊をパラクレートス（παράκλητος）と呼び、キリストについて証言する

働きを強調している（14:16-17; 15:26）。聖霊の到来に伴い、弟子たちもキリストについて証言することになる（15:27）。真理によって弟子たちは聖別されている（17:17, 19）。

キリストはローマ総督による審問の場で、自らの到来の目的が真理について証しするためであることを明らかにする（18:37）。法廷は告発と弁明と証言により真実を明らかにする場であるが、キリストは刑事被告人である自己の立場を擁護し、無罪判決を勝ち取ることも、神の子としての活動の真理性を明らかにすることに心を砕いている¹⁷。これに対して、裁判長のピラトは「真理とは何か？」と言っただけで、それ以上問うことはしない（18:38）¹⁸。ローマ帝国の権力機構を担う当事者にとり、治安の維持とは直接関係のない真理への問いは切実なものではなかった¹⁹。

3.1.4 真理の霊（14:17; 15:26）

別れの説教においてイエスは、復活・昇天の後に父なる神のもとから遣わされる聖霊を「真理の霊（τὸ πνεῦμα τῆς ἀληθείας）」と呼ぶ（14:17; 15:26）。この霊をこの世は受けることも知ることもないが、弟子たちはそれを受けることとなる（14:17）。こうした主張の背景には、キリストの中に真理を見いだす信徒集団であるヨハネ共同体とそれを認めない周辺世界との対立の中で、共同体が自分たちの見解の正当性の根拠を聖霊の働きに見ていた事実がある²⁰。イエスとその弟子たちの物語である福音書の記述では、聖霊の到来は未来に起こることとして語られているが、この物語に耳を傾けているヨハネ共同体の人々には既に現実となっている事柄であった²¹。

聖霊は弟子たちのうちに働いてイエスが語った言葉を思い起こさせ、教える（14:26）。イエスが語る言葉を聞いた時に弟子たちはそれを十分に理解することは出来ないのだが、聖霊によって想起起こす過程でその意味を理解し、真理を認識することとなる（16:1-4, 12-13）。聖霊は世に罪と義と裁きについて教える（16:8-11）。ヨハネ共同体の人々は、聖霊の導きによって繰り返しイエスの言

葉を想起しながら、真理に近づいて行くという体験をしていた²²。

3.2 ヨハネ書簡における真理

ヨハネ書簡において真理は偽りとの対照のもとに主張されている（Iヨハ1:6, 8; 2:4, 21; 4:6）²³。この場合偽りとされているのは、正統ではない福音理解であり、ヨハネ福音書が書かれた後にヨハネ共同体の中に生じた分派活動とそれに伴う教理論争を反映している。共同体に属する者は、真理を知り（IIヨハ1:1; IIIヨハ1:8）、真理の中に歩んでいると自負している（Iヨハ1:1; IIヨハ1:4; IIIヨハ1:4）。ここで主張されている真理とは、イエスが神の子キリストであると共に（Iヨハ2:22-23）、私たちが罪人であり、キリストの血により罪から清められているという福音理解であり（Iヨハ1:7, 9）、偽りとは自分たちが罪を持つことを否定する見解である（1:8）。また、イエスがキリストであることや神の子であることを受け入れず、キリストの受肉を否定する者は反キリストであると宣言されている（2:18, 22-23）。正統な理解を持つ者は真理の霊たる聖霊に導かれており、異端的な理解を持つ者は偽りの霊に導かれているとされている（4:6）²⁴。

偽りを主張する人々は光である神と交わりを持つと言いながら、闇の中を歩む結果となっている（Iヨハ1:5）。真理に歩んでいるのか、偽りのうちにあるのかどうかを見分ける試金石は、互いに愛し合いなさいという戒めを守っているかどうかである（Iヨハ2:4; 3:11 IIヨハ1:1, 3）。

まとめと展望

新約聖書の真理論は一般的・抽象的な哲学的理論としてではなく、初代教会が置かれた論争的状況の中で、何が真理であり、何が偽りなのかを考察し、論じることを通して形成されている。ユダヤ教の革新運動として始まったキリスト教は、まもなく母体であるユダヤ教の枠を超え、異邦人世界に広がって行ったが、その過程で周辺世界を構成する異邦人世界やユダヤ人世界と真理について

の論争を繰り返しながら、新しい真理認識や信仰理解を形成して行った。

「異邦人の使徒」であり（ロマ 11:13）、初代教会最大の宣教者であったパウロは、真の神は唯一であり（I コリ 8:6; I テサ 1:9）、天地を創られた神だけが神であるという一神教的世界観を真理とし、人間や動物を模した神々の像を拜む異邦人世界の宗教観を誤りとしている（ロマ 1:18-32）。このことはキリスト教への回心者たちが第一に学ぶべき真理であった。

キリスト教内部の福音理解を巡る論争は真理論の対内的展開である。律法と福音を連続的に考えるユダヤ的な福音理解に対して、パウロは律法からの自由を「福音の真理」と呼び（ガラ 2:5, 14）、その根拠を自らに示された神の召しと啓示に求めた（1:1, 15-16）。真理を論証する手段として、初期キリスト教において規範的意義が認められていた旧約聖書や教会の伝承を彼は援用した。パウロは死者の復活の信仰の真理性の根拠をキリストの死と復活を内容とする初代教会の伝承に求めた（I コリ 15:1-8）。信仰義認の教理の真理性については、旧約聖書を引用して聖書証明を試みている（ロマ 1:16-17; 4:1-25; ガラ 3:6-29 他）。

ヨハネ福音書において、神の子イエスは恵みと真理の啓示者であるが（ヨハ 1:14, 17）、そのことは信じる者が体験し、証言する信仰告白的な事柄であった。弟子たちに与えた別れの説教においてキリストは自らが、「道であり、真理であり、命である」ことを明らかにしている（14:5-6）。真理を体現するイエスの言葉を信じ、そのもとに留まる者は、イエスの弟子として真理を知り自由を得ることとなるが（8:31-32）、信じない者は虚偽の内に留まり続け、罪のうちに死ぬこととなる（8:24）。

聖霊は「真理の霊」であり（14:17; 15:26）、この霊をこの世は受けることも知ることもないが、弟子たちはそれを受けるとなる（14:17）。キリストの中に真理を見いだす信徒集団とそれを認めない周辺世界との対立の中で、ヨハネ共同体は自分たちの見解の正当性の根拠を聖霊の働きに見

ていた。聖霊は弟子たちのうちに働いてイエスが語った言葉を思い起こさせ、教える（14:26）。イエスが語る言葉を想起すること（アナムネーシス）は、真理の認識に到る大切な過程とされた（16:1-4, 12-13）。

ヨハネ書簡の真理論争は、ヨハネ福音書が書かれた後にヨハネ共同体の中に生じた分派活動に伴う教理論争を反映している。共同体に属する者は、真理を知り（II ヨハ 1:1; III ヨハ 1:8）、真理の中に歩んでいると自負している（I ヨハ 1:1; II ヨハ 1:4; III ヨハ 1:4）。ここで主張されている真理とは、イエスが神の子キリストであると共に（I ヨハ 2:22-23）、私たちが罪人であり、キリストの血により罪から清められているという理解であり（I ヨハ 1:7, 9）、偽りとは自分たちが罪を持つことを否定する論敵たちの理解である（1:8）。また、キリストの受肉を否定する者は反キリストであると宣言されている（2:18, 22-23）。正統な理解を持つ者は真理の霊たる聖霊に導かれており、正統でない理解を持つ者は偽りの霊に導かれているとされる（4:6）。間違ったことを主張する人々は光である神と交わりを持つと言いながら、現実闇の中を歩んでいる（I ヨハ 1:5）。真理の中にあるのか、偽りのうちにあるのかどうかを見分ける具体的基準は、愛の戒めを守っているかどうかである（I ヨハ 2:4; 3:11 II ヨハ 1:1, 3）。この段階になると福音理解をめぐる真理論争は、共同体の分裂抗争の中で何がキリスト教信仰であるかを定める正統・異端論争の性格を帯びた。

注

- 1 本稿は2019年9月10日に青山学院大学において開催された、日本基督教会第67回学術大会のシンポジウム「キリスト教における真理論」のパネリストとして行った口頭発表を文書化したものである。尚、当日の発表の要旨は『日本の神学』第59号、2020年、154-159頁にシンポジウム報告の一環として掲載されている。
- 2 ロマ 1:18-32の詳しい釈義的分析については、原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』新教出版社、

- 2016年、94-101頁を参照。
- 3 ロマ 1:18-32 の詳しい釈義的分析については、原口尚彰『ローマの信徒への手紙 上巻』新教出版社、2016年、94-101頁を参照。
 - 4 ディアスポラ・ユダヤ教が用いていた七十人訳聖書では ἀλήθεια も πίστις も אמת / אמינה の訳語となっており、両者は互換的である。パウロも七十人訳の用語法を継承している。この点については、原口尚彰『パウロの宣教』教文館、1998年、198-199頁を参照。
 - 5 Christof Landmesser, *Wahrheit als Grundbegriff neutestamentlicher Wissenschaft*, WUNT 113 (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1999), 246-247 を参照。
 - 6 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年、52-61頁を参照。
 - 7 原口、同 27-34頁；John M.G. Barclay, *Obeying the Truth: Paul's Ethics in Galatians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1988), 45-60, 73-74; Paulus Toni Tantonio, *Speaking the Truth in Christ: An Exegetico-Theological Study of Galatians 4,12-20 and Ephesians 4,12-16*, TGST 164 (Rome: Gregorian University Press, 2008), 89-90 を参照。
 - 8 原口、同 105-106頁；Tantonio, *Speaking the Truth*, 97-100; Ernst Käsemann, "Galater 1,1-2,10: Die Freiheit des Apostels," in idem., *In der Nachfolge des gekreuzigten Nazareners* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2005), 69-80 を参照。尚、Barclay, *Obeying the Truth*, 76-83 は律法からの自由としての福音がユダヤ教とは異なる新しい社会的アイデンティティと行動様式を与えることに注目する。
 - 9 Landmesser, *Wahrheit als Grundbegriff*, 224-225 を参照。
 - 10 Landmesser, *Wahrheit als Grundbegriff*, 222-223 もこの点に注目している。
 - 11 Büchsel, *Begriff*, 80-84; Peter G. Kirchschräger, *Nur ich bin die Wahrheit. Der Absolutheitsanspruch des johanneischen Christus und das Gespräch zwischen den Religionen*, HBS 63 (Freiburg: Herder, 2010), 105-106; Udo Schnelle, *Das Evangelium nach Johannes*, THKNT4; 5. neu bearb. Aufl. (Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2016), 58-59; Hartwig Thyen, *Das Johannesevangelium*, HbNT6; 2. Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2015), 93-94; Jean Zumstein, *Das Johannesevangelium*, KEK (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2016), 84-86 は、ヨハ 1:14 の持つ信仰告白の側面を強調する。また、Yu Ibuki, *Die Wahrheit im Johannesevangelium*, BBB39 (Bonn: Peter Hanstein, 1972), 198-207; Schnelle, *Johannes*, 301 は、人間に対して啓示されるキリストの真理をキリストにおける神の愛の表現であるとしている。
 - 12 Rudolf Bultmann, *Das Evangelium des Johannes*, KEK; 20. Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1941), 44-48; idem., *Theologie*, 370-371; Schnelle, *Johannes*, 59 は信仰による認識の側面を強調する。
 - 13 Bultmann, *Theologie*, 367-368.
 - 14 この文章における道と真理といのちの関係については、Ignace La Potterie, "The Truth in Saint John," in *The Interpretation of John*, ed. John Ashton (Philadelphia: Fortress; London: SPCK, 1986), 59-60; Craig Koester, "Jesus as the Way to the Father in Johannine Theology," in *Theology and Christology in the Fourth Gospel*, eds. G. van Belle - J. G. van der Watt (Leuven: University Press, 2005), 117-133 を参照。
 - 15 Rudolf Schnackenburg, *Das Johannesevangelium*, HTKNT4/1-3; 2. Aufl. (Freiburg-Basel-Wien: Herder, 1977), 2:260-261, 278-284; Schnelle, *Johannes*, 208 はヨハネ福音書における真理概念の救済論的意義を強調する。また、Schnelle, *Johannes*, 208; Hans Hübner, "Wahrheit und Wort: Heideggers „Vom Wesen der Wahrheit“ und Wahrheit im Johannesevangelium," in idem., *Wahrheit und Wirklichkeit: Exegese auf dem Weg zur Fundamentaltheologie* (Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 2005), 155-156 は、真理概念の認識論的な側面を強調して、罪や死からの自由を得ることはキリストの真理を知ることの直接的効果であるとしている。
 - 16 ヨハネ福音書 8章においてイエスが語る言葉と真理との密接な関係については、Ibuki, *Wahrheit*, 88-116; Hübner, "Wahrheit und Wort," 156-157 を参照。
 - 17 Andrew T. Lincoln, *Truth on Trial: The Lawsuit Motif in the Fourth Gospel* (Peabody, MA: Hendrickson, 2000), 226-228 を参照。
 - 18 Schnackenburg, *Johannesevangelium*, 3:287; Schnelle, *Johannes*, 354; Kirchschräger, *Nur ich bin die Wahrheit*, 243-245 は、この発言をイエスの真理の主張への拒絶と見る。
 - 19 Bultmann, *Johannes*, 508.
 - 20 Schnackenburg, *Johannesevangelium*, 3:85-86; Thyen, *Johannesevangelium*, 629.
 - 21 Schnelle, *Johannes*, 303; Zumstein, *Johannesevangelium*, 545; 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店、1991年、104-109、187-199

頁を参照。

- 22 Schnelle, *Johannes*, 308-309; Zumstein, *Johannes*, 546.
- 23 Büchsel, *Begriff*, 53-63 もこの点に注目している。
- 24 Büchsel, *Begriff*, 100, 104.

What is the True Gospel?: A Reflection on the Understanding of the Truth in the New Testament

Takaaki Haraguchi

Early Christianity formed its understanding of the truth in the context of the disputes with the surrounding world consisting of Jews and Gentiles. The proclamation of the early church declared the monotheistic truth of the Creator over against the polytheistic religions of the Gentile world (Romans 1:18-32). According to Early Christian belief, God is one and there exists no other god (1 Corinthians 8:6; 1 Thessalonians 1:9).

The disputes concerning the truth among the early Christians were caused by the different understandings of the gospel of Jesus Christ. Paul called the freedom from the Law the truth of the gospel (Galatians 2:5, 14), while Jewish Christian opponents found a continuity between Law and gospel. He tried to prove the truth of his understanding by citing relevant Old Testament texts (Romans 1:16-17; 4:1-25; Galatians 3:6-29 etc.).

In the Gospel of John, Jesus, the Son of God, is depicted as the revealer of divine grace and truth (John 1:14, 17). In his farewell speech given to his disciples, Christ said, "I am the way, the truth, and the life" (John 14:5-6). Those who believe his words and stay in them will attain truth and freedom (8:31-32), while those who do not believe will continue to stay in falsehood and die in sin (8:24).

Keywords: The New Testament, gospel, truth, the early church, Paul